教職開発研究　第２号　2019　19－28

「国際理解，国際親善」に関わる道徳的実践意欲を育む実践研究

―内容項目Ｃ「伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度」と関連した指導を通して―

中島　敦夫・宮里　智恵

Practical research fostering a Moral practical desire related to "international understanding, international goodwill"
—Through the guidance related to the content item C "respect for tradition and culture・attitude to love nationalities and local folk"—

Atsuo NAKASHIMA and Tomoe MIYASATO

Abstract: This research aims at nurturing Moral practical desires in the learning of content item C "international understanding and international goodwill" in special subject morality. While studying and associating the content item C "respect for tradition and culture・attitude to love the country and the community", practical examination was carried out at the fifth grade of the elementary school. The outcome was that we were able to organize the stage of development of moral practical desires and moral thinking to children through practice. The task is to practice at the elementary school lower grade or middle school year. It is a comparative experiment of whether or not the content items are related.

Key words: Special subject morality・International Understanding / International Friendship・Respect for tradition and culture
キーワード：特別の教科道徳・国際理解・国際親善・伝統と文化の尊重

１．問題の所在

平成30年度より小学校では，これまで領域として位置付けられてきた「道徳の時間」は，「特別の教科道徳」として行われている。この改正は，「いじめ問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものとする観点からの内容の改善，問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図ることなど[1)]」を示したものとしている。内容の改善に伴って，内容項目も系統的・発展的に見直されたが，その一つに「国際理解・国際親善」がある。「国際理解・国際親善」は，以前は小学校においては，５・６学年のみで実施されていたが，今回の改正で１・２学年，３・４学年でも実施されるようになった。「国際理解・国際親善」の内容項目が充実した背景には，近年進展するグローバル化が挙げられる。2020年に東京オリンピックの開催を控え，生活の中で国際化，グローバルスタンダードなどの言葉を聞く機会が増えてきている。日本を観光で訪れる外国人の数は，日本政府観光局によると2016年では24,039,700人である。これは，2003年の5,211,725人と比べると５倍近い数になっている。私たちが日本に居ながらにして外国人と触れ合う機会は確実に増えており，国際化が以前にも増して急激に進展しているといえる。また，通信機器等の発達により，インターネットを活用して，ソーシャルネットワーキングサービスやweb会議などを通して，それぞれの国，もしくは家にいたままで顔を見ながらやり取りができるようになった。

中央教育審議会答申（2016）においても，現代的な教育の諸課題の一つとして「グローバル化の中で多様性を尊重するとともに，現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史について理解し，伝統や文化を尊重しつつ，多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力[2)]」が挙げられている。道徳科の中でも国際理解・国際親善に関する資質・能力を育むことは喫緊の課題であるといえる。

２．研究の目的

小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編の内容項目Ｃ「伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度」

の概要に「次の内容項目の『国際理解・国際親善』に関する指導と相まって，国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚と責任をもって，国際親善に努めようとする態度につながっている点に留意する必要がある[3]」と書かれている。このように内容項目C「国際理解・国際親善」と内容項目C「伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度」は密接なかかわりがあるといえる。安野（2010）は，「自分の国を愛し，平和のうちに生存する権利を守ろうとする国民一人一人の思いが，わが国だけでなく同じ思いを持つ他国の人々をも尊重しなければならないという，国際的視点にもつながる。[4]」と述べ，自国の伝統や文化と国際的視点との関連を指摘している。自国の伝統や文化の理解や尊重する心が，異文化に生きる人々がそれぞれの伝統や文化を大切にしている心情を理解することにつながるものである。

また，貝塚（2016）は，「道徳科の中で『国際理解・国際親善(国際貢献)』の価値理解を実現するためには，『愛国心』とともに，『相互理解・寛容』『公正・公平・社会正義』『社会参画・公共の精神』『遵法精神・公徳心』『生命の尊さ』等の道徳的諸価値との関連性と連続性を意識した体系的かつ構造的な授業を展開する必要がある。[5]」としており，指導する意図や発達段階，教材などに合わせて内容項目を関連させて指導することは効果的であると指摘している。本研究では，この中でも特に，内容項目C「国際理解・国際親善」とC「伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度」の関連を図る指導を取り上げる。その理由は，伝統と文化は，それぞれの国で先人の努力によって作られ，長い年月をかけて発展し，受け継がれてきたものである。伝統と文化にはそれぞれの国の価値観が含まれており，多様性を認め合うことを重視する内容項目C「国際理解・国際親善」においては欠かせない要素であると考えたからである。

また，道徳科においては，道徳性を構成する諸様相として道徳的判断力，道徳的心情，道徳的実践意欲と態度が挙げられている。この中で道徳的実践意欲は，「道徳的判断力や道徳的心情を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志の働き[6]」とされている。総合的な学習の時間における国際交流活動など実際の交流場面では，自分がどのような思いをもって，どのように行動していくかということが，お互いがよりよく関わっていくということにつながる。そのためには，特別の教科道徳の内容項目C「国際理解・国際親善」において，判断から行動につながる意志の働きを示す道徳的実践意欲の育成が重要になってくる。

以上のことから，本研究では，内容項目C「国際理解・国際親善」について，内容項目C「伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度」との関連を図った指導を行うことを通して，児童に対する道徳的実践意欲を育んでいくことを目的とする。

3．研究の方法

(1) 道徳的思考の発達を意識した内容項目の関連

授業実践では，育みたい道徳的実践意欲の設定を基に教材研究を行い，内容項目を関連させる視点を設定する。道徳科において，内容項目C「国際理解・国際親善」を取り上げる際の切実な課題として，貝塚(2016)は，「何よりそれぞれの多様性を認めながら，その多様性の中に普遍的な価値を見出し，それを自らの生き方につなげることのできる資質・能力を育成すること[7]」としている。子どもたちは，日常生活や学校生活において，様々な国の文化や人々に触れている。これは，発達段階が上がるとともにその機会が増えてくる。付けたい資質・能力である道徳的実践意欲を発達段階に応じて明らかにすることは，このような社会に対応できるようにしていくためにも有意義である。

発達段階に応じた資質・能力の設定にあたっては，鈴木ら（2009）がセルマンの社会的視点取得理論に基づいて行った研究から整理した道徳的思考の発達（表1）[8]を参考にした。この表に小学校道徳科内容項目C「国際理解・国際親善」，中学校道徳科内容項目C「国際理解，国際貢献」の目標（表2）を取り入れながら作成した内容項目C「国際理解・国際親善」における道徳的思考の発達が表3である。

表1　鈴木ら（2009）が整理した道徳的思考の発達

カテゴリー	子どもの思考の特徴	社会的視点取得理論
【カテゴリー1】自己中心思考	・他者の思考や感情が自分と異なることに気付く。	段階1：文化と主観的な役割取得
【カテゴリー2】他者思考	・他者の視点に立ち，その視点から自分の考えや感情を考えることができる。	段階2：自己内省的／二人称と二者相互の役割取得
【カテゴリー3】自己相互思考	・自己と他者の考えを関係づけることができる。	
【カテゴリー4】第3者的思考	・自己と他者の考えを客観的に見ることができ，第3者の視点から自己と他者の思考を調整することができる。	段階3：三人称と相互的役割取得
【カテゴリー5】社会的思考	・自己の視点を集団全体や社会全体を見る視点と関係づけることができる。	段階4：広範囲の慣習的―象徴的役割取得

表２　内容項目Ｃ「国際理解・国際親善」※の目標

学　年	目　　標
小学校低学年	他国の人々や文化に親しむこと。
小学校中学年	他国の人々や文化に親しみ，関心をもつこと。
小学校高学年	他国の人々や文化について理解し，日本人としての自覚をもって国際親善に努めること。
中学校	世界の中の日本人としての自覚をもち，他国を尊重し，国際的視野に立って，世界の平和と人類の発展に寄与すること。

※小学校は，「国際理解・国際親善」中学校は，「国際理解・国際貢献」
※太字は，本稿第一筆者加筆

表３　道徳的思考の発達（「国際理解・国際親善」）

カテゴリー	子どもの思考の特徴
【カテゴリー１】自己中心思考	他国の人々や文化に気付き，親しむ。（知る・気付く・親しむ）
【カテゴリー２】他者思考	他国の人々や文化は大切なものであることに気づき，他国の人々のことを考えながら交流していこうとする。（相手意識）
【カテゴリー３】自己相互思考	自国の文化と他国の人々や文化それぞれの違いやよさを知り，それぞれを関連付けながら関わっていこうとする。（自分たちと同じように）
【カテゴリー４】第３者的思考	様々な文化や価値観を背景にする人々と相互に尊重しあい，発展することができるように判断基準をもって考えていこうとする。（認め合う・協働・お互いの利益）
【カテゴリー５】社会的思考	世界の中の日本人として，自らの役割と責任を果たしながら，他国を尊重し，国際的視野に立って，世界の平和と人類の発展に寄与するためにできることを考える。（社会全体・世界）

※（　）内は，キーワード　本稿第一筆者作成

カテゴリー１は，自己中心思考である。ここでは，自分とは違った他国の人々や文化の存在に気付いていく中で親しみを持ったり，よさに気付いたりしていくことである。話し合いや資料，実際の体験などを通して気付いていく。この段階は主に小学校低学年～中学年に多く見られるものである。

カテゴリー２は，他者思考である。これは，相手の立場に立って考える思考である。他国の人々や文化に気付く段階から徐々にそれぞれのよさに気付いてくるようになる。他国の人々にとってそれぞれの文化は大切なものであることを考えることを通して，相手の立場を大切にしようとするものである。この時に自分よりも相手を大切にしていこうという傾向がみられる。この段階は主に小学校中学年～高学年に見られるものである。

カテゴリー３は，自己相互思考である。自他相互の考えの違いを調整しようとする思考である。ここでの関連付けるとは，自分たちと同じように他国の人々も文化に愛着や誇りを持っていることに気付くことである。それぞれの国の人々や文化を大切にしていきたいが，悩みながら葛藤する時期である。この段階は，小学校高学年から中学校に見られる。

カテゴリー４は，第３者的思考である。これは価値基準で判断する思考であるとされる。様々な文化や価値観を背景にする人々が，関わっていく時に悩みや葛藤の段階から進んで価値観を持って調整することである。この価値観には，相互の文化的背景を尊重する心情が含まれており，お互いにとってよりよい形を模索するものになる。この段階は，小学校高学年から見られ，中学２年生ごろから顕著にみられるとされる。

カテゴリー５は，社会的思考である。価値観を自分が所属する集団や社会の価値観と照らし合わせて調整していくとされている。国際理解においては，自分たちの国家から世界へと視野を広げ，日本人として世界のためにできることという視点を持っていくことが社会的思考にあたる。この段階は中学生以降に見られるとされている。

この表３を基に，実践では内容項目Ｃ「国際理解・国際親善」における評価の指標であるルーブリックを設定し，実践に取り組んでいく。

(2) 評価について

①質問紙調査の活用

質問紙調査にて内容項目Ｃ「国際理解・国際親善」に関する資質・能力を測定するにあたって参考にしたのが，鈴木ら（2000）の開発した国際理解尺度と武田ら（2017）の調査結果である。武田らは，小中学校の教職員を対象に質問紙調査を行い，児童・生徒に対して教師が理想とするグローバル人材としての資質・能力の獲得期待に関連する項目を特定する研究を行った。ここで実施した質問内容を，文章を小学生用に再構成して調査を実施した。また合わせて，自由記述の項目も設定した。児童の変容を見るために質問紙調査は，事前と事後に実施した。作成した質問紙は（表４）である。

表4　実施した質問項目

質問項目
1 相手の様子を見ながら，行動をすることができる。
2 相手の気持ちを考えながら，話すことができる。
3 いろいろな人と関わることを大切にしている。
4 他の人からのアドバイスを素直に聞いて，考えを改めることができる。
5 他の国の文化に出会ったときに文化のちがいをみとめることができる。
6 自分とは違う考え方が出た時にその考えをみとめることができる。
7 自分の考えを話す時にまちがえることを恐れてしまう。
8 自分の国やその文化に対して，親しみを感じる。
9 他の国の文化は，そこ住む人々にとって大切なものだと思う。
10 初めてあった人にも自分から話しかけていくことができる。
11 他の国に住む人々と仲良くなりたい。
12 他の国の文化をもっとよく知りたい。
13 他の国の文化を進んで取り入れることは，日本の文化にとってもいいことだと思う。
14 日本の文化を大切にしていきたい。
15 いろいろな国の文化について，知ったり，学習をしたりすることは大切なことだと思う。
16 いろいろな国の人とよりよく関わっていきたいと思う。
17 面白い考えを思いつくことができる。
18 人とは違った自分にしかない考えをよく思いつく。
19 新しい考えやアイデアを考えるのが苦手だ。
20 物事を考えたり，アイデアを出したりする活動が好きだ。
21 友達や様々な人と関わり合いながら学習すると，今までになかった考え方や見方を身に付けることができる。

②児童の記述内容の分析

記述内容を分析するにあたって，本研究は，道徳的実践意欲の育成を目指しているため，質問内容の設定にあたっては「実際に自分ならどのように行動するのか」具体的な行動への身構えとその心情を問うものにした。

・パフォーマンス評価の実施

表3の道徳性志向の発達を基に内容項目C「国際理解・国際親善」のルーブリックを作るとともにパフォーマンス課題を設定し，達成度について調査をする。

・事前事後の道徳的実践意欲の変容

質問紙自由記述項目「色々な外国の人とより良く関わっていくために大切なこと」の記述内容をKHコーダにて出現語数を分析しその変容を分析する。

4．研究仮説

道徳科内容項目C「国際理解・国際親善」において，内容項目C「伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度」と関連した指導を行えば，児童の道徳的実践意欲を育成することができるであろう。

5．授業実践の概要

(1) 対象

H県M小学校　5年1組32名
　　5年2組31名

(2) 研究期間と授業時数等

平成30年10月25日(水)～11月7日(木)に道徳科授業を各学級2時間ずつ実施した。

(3) 実施授業

○授業①

「おおきに　ありがとう」(出典：「道徳5きみがいちばんひかるとき」光村図書) C［伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度］

○授業②

「小さな国際親善大使」(出典：「道徳5きみがいちばんひかるとき」光村図書) C「国際理解・国際親善」

(4) 道徳的実践意欲の設定

表3の道徳的思考の発達を基にして，教材「小さな国際親善大使」内容項目C「国際理解・国際親善」に関わるルーブリックを作成した。

ルーブリック作成の際には，対象校の児童の実態を考慮した。事前に質問紙調査を行った結果から，自由記述「色々な外国の人とより良く関わっていくために大切なこと」に対して，無回答及び適切な回答を思いつかなかった児童は，全体の25％であった。そこで，カテゴリー2の他者思考である他者を意識して具体的な行動につなげることを本時の到達目標となるレベルⅢの目標にすることにした。評価規準は，「様々な国の人々とよりよくつながるためには，他国への関心を高め，理解をしていくことが大事であることに気づき，自分にできることを考えることができる。」である。これは，他国の人々にも大切な文化があるということを認めた上で相手の立場に立ってよりよく交流していこうとする態度や相手の文化に価値を見出すことができたかを見るものである。

これを基準にして，レベルⅡは，カテゴリー1にあたる自己中心思考から自分自身の興味関心が中心になっているもの，もしくは他者思考が感じられないものにした。

レベルⅣは，カテゴリー3の自己相互思考を基に考えた。それぞれを関連付けるということで，自分が自

国の文化を大切にしていることと同じように他の国の人々にとってもその文化が大切なことに気付いていることである。また，お互いがよりよく関わるということは，お互いにとって有意義なものであるといった双方向のつながりに気付くことができるものという回答もこの段階にあたる。双方向のつながりに気付くことは，カテゴリー4の第3者的思考に深く関連するものであるが，カテゴリー3，4を区分する葛藤の有無については本教材の評価内容では判断が困難であるため，便宜上カテゴリー3として考える。

パフォーマンス課題は，「これからいろいろな国の人々と関わっていく時に気を付けていきたいこと」とした。

(5) 内容項目を関連させる視点

本研究では，「おおきに　ありがとう」内容項目C「伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度」と「小さな国際親善大使」内容項目C「国際理解・国際親善」の2つの教材を関連させて行った。この2つの教材をつなぐ視点は，それぞれの国の文化にはよさがあり，そのよさをお互いに知ることで新たな文化が生まれ発展していくということである。これは，ルーブリックにある「よりよくつながっていく」という言葉につながるものである。

二つの教材の指導を通して，それぞれの国の文化についてのよさを考えていく活動を取り入れる。教材「おおきにありがとう」では，我が国の伝統や文化について取り上げる。ここでは，我が国の伝統と文化の持つよさについて，海外の人から見た視点と生活の中でのかかわりなどを想起させながら実感をしていき，尊重をしたい心情へとつなげる。教材「小さな国際親善大使」では，他国と日本の文化を比較しながら，その違いや文化に込められた思いに気づくようにする。この際に日本の文化と同じようにそれぞれの国の人にとって文化が大切なものであることが分かるきっかけになる。また，それぞれの教材にお互いの文化交流を通して，それぞれの文化が発展をしている描写があり，関連付けながら提示することでそれぞれの文化のよさを学ぶことに意義に触れることが可能である。

6．指導の実際

(1) 授業①「おおきに　ありがとう」について

○主題名

伝統や文化を知る　C［伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度］

○ねらい

「日本の和菓子はすばらしい」と言われ，大事な気持ちに気付く私の姿を通して，日本の伝統や文化を大切にすることの意味を考えるようにするとともに，受け継がれている我が国の伝統や文化を尊重し，国際親善の意識につなげようとする道徳的実践意欲を育てる。

○主題に関わって

現代の私たちの生活は，たくさんの有形無形の伝統や文化の基に成り立っている。これらは，先人が積み上げて現代につないできたものであり，「おもてなし」に代表されるように相手を思う心遣いもその中にある。今日でも，現在の私たちの生活に合わせて伝統や文化は発展を続けているとともに，世界の各国でもそのよさや価値が認識されている。現在を生きる私たちが，自らの体験を通して伝統や文化

表5　内容項目C「国際理解・国際親善」に関わるルーブリック

	評価基準	児童のパフォーマンス事例	基準達成のための手立て
Ⅳ	様々な国の人々とよりよくつながるために，相手の文化について尊重し，それぞれの文化の関連性を意識しながら，自分にできることを考えることができる。	お互いの文化を知って認め合っていきたいです。私たちの文化と同じように他の国の人もその国の文化を大切にしているからです。	意見交流をしながら，自分にはない見方や考え方をメモして，多面的・多角的に考えることができるようにする。
Ⅲ 評価規準とする	様々な国の人々とよりよくつながるためには，他国への関心を高め，理解をしていくことが大事であることに気づき，自分にできることを考えることができる。	相手の文化を知りたいです。そのわけは，自分たちの文化を押し付けてしまうと相手が嫌な思いをするからです。	それぞれの国の文化とその意図を板書で整理しながら，相手側の立場に立つことができるようにする。
Ⅱ	様々な国の人とよりよくつながっていくためにできることを思いつく。	いろいろな国の人と分かり合うためには，相手の文化を知りたいです。理由は面白そうだから。	教材文中の登場人物の行動などから，見習いたい行動についてラインを引くなどして具体を考えるようにする。
Ⅰ	様々な国の人々が関わっていくためにはどうしたらよいのか思いつかない。	よく分かりません。	

と関わり，その背景やよさを知ることは，伝統や文化に対しての愛着や誇りを持つことについて理解することにつながる。また，自国の伝統や文化の本質について理解し，大切にしていこうとする態度は，「国際理解・国際親善」の学習において，そのよさを知ることや，他の国にも自分たちと同じように文化があり，大切にしているといった心情理解にもつながってくる。

○教材について

本教材は，「和菓子」を我が国の伝統文化として取り上げている。和菓子は，写実的で，またある時は抽象的に作られ，四季に応じて様々な顔を映し出す特性があり，職人の伝統の技や歴史，文化が散りばめられている。本教材は，家業で祖父と父親が和菓子屋を営む主人公の「わたし」が，外国から来たお客さんとの交流を通して，和菓子のよさに気付くとともに日本人として大切なことを思い出すという内容になっている。また，教材の和菓子職人さんのお話では，伝統の技を受け継ぐことの大変さやお客さんに喜んでもらうための工夫が述べられている。教材を通して，日本の伝統や文化のよさを大切にしていくことは，自分たちの国の伝統や文化を尊重していくということであり，今後，発展させていこうとする態度へとつなげていくことができる。また，和菓子は，様々な国の文化を参考にしながら現代でも発展を続けている。昔からある文化を盲目的に大切にするというわけではなく，様々な国の多様性から学んでいこうとする児童の国際的な視野の育成にも貢献することができる教材である。

○授業の様子から

導入では，和菓子についてスライド資料などを用いて紹介を行った。和菓子についてじっくりと見た経験のある児童は少なかったが，その造形的な美を感じ取ったり，味わった経験を話したりしながら興味を持った。そこから，和菓子の歴史についても知り，これまで学習してきた浮世絵なども想起しながら「昔からある文化は，どうして長い間大切にされてきたのだろう」という学習課題を設定した。展開前段では，主人公の心情の読み取りを通して，和菓子の文化としての価値について考えた。また，和菓子職人の話を紹介し，技術を受け継ぐことの大変さやお客さんに喜んでもらうために積極的に他国の文化などを取り入れていることを紹介した。ここで児童が和菓子のよさとして見出したキーワードは，「技，真心，受けついだ」である。展開後段では，和菓子以外の日本に昔からある文化についての交流を行った。この内容については，授業中では実施が難しいため，事前に家庭学習として調べてきた。畳や着物など身近な文化について交流をしながら，自分たちの生活は，伝統と文化に囲まれていることを再認識していた。終末は，日本の文化がなぜ長い間大切にされてきたのかについて話し合った。この時に出た考えは以下の通りである。

・外国の人も日本の文化を知って深まっていくから。
・外国にはない日本のよさがあると思います。
・人々が作り上げてきた大切なものだから，ずっと長い間大切にされてきたものは，人々が何年もかけて作りあげてきた結晶だから。

外国の人が見てすばらしい文化という視点から，話し合いを通して日本独自のもの，日本文化の持つよさへと視点を向けていった。この時の話し合いから文化を長い間大切にしてきたことに関するキーワードとして，「長い間作り上げてきた，便利さ・よさがある」が見出された。このような過程を通して，日本の伝統と文化の持つよさについて考えた。終末に「昔からある文化についてどのように関わっていきたいか」という視点で振り返りを行った。「大切にしたい」という抽象的なものや「いろいろな人に教える」「残ってきた意味を食べて感じたりしたい」「調べていきたい」等の具体的な回答が見られた。

図１　道徳科「おおきにありがとう」板書

（2）授業②「小さな国際親善大使」について

○主題名

他国の人々を理解して　C［国際理解，国際親善］

○ねらい

国ごとの文化や習慣の違いに関心を抱く芽衣の姿や国境を越えて活躍するロギールさんの姿から国際理解の大切さについて考え，相互に尊重し，高めあいながら，国際親善に努めていこうとする道徳的実

践意欲を育てる。

○教材名

「小さな国際親善大使」（出典：「道徳５　きみがいちばんひかるとき」光村図書）

○主題に関わって

他国の人々とつながり，お互いの文化を交流して高め合いながら新しい価値を生み出していくことが重要になってきている。本教材では，他国の人々や文化の多様性を理解し，自分にできることを考えながら進んで関わっていこうとする態度の育成を目指している。他の国の文化は，そこに住む人々の願いや思いが込められて作られてきたものであり，私たちが自分の国の伝統や文化を大切にしているのと同じようにそれぞれの国でも同じように大切にされてきたものであることを理解していくことが，他国の人々や文化を理解することになっていくものである。

○教材について

本教材は，主人公の芽衣が海外の方との交流を通して日本と他国の文化や習慣の違いに出会い，最初は戸惑いを感じるが，兄や母の姿からお互い国の違いを理解することが自分たちと他国の人々や文化をつなぐ大切なことだと気づき，率先して自分なりの国際親善に努めていこうと決意する内容である。題名にもあるように国と国をつなぐ役割として「国際親善大使」がキーワードとして挙げられている。また，教材文の末にはオランダ人和紙職人ロギールさんの話が載っており，日本の和紙と西洋のコットンペーパーを組み合わせて新しい紙である和蘭紙を作り出した事例が紹介されている。ここから，お互いの国の文化が交流することで新しい価値が生み出せるということが分かる。本教材を通して，様々な国の人々と分かり合うことの価値を知り，そのために，国ごとの文化や習慣の違いがあることを進んで理解し，認めあっていこうとする国際親善の態度を養うことが目的である。

○授業の様子から

導入では，欧米と日本の家族がそれぞれの部屋でくつろぐ様子を表した２枚の写真を提示した。ここで，部屋で靴を履くかはかないかということを話し合い，文化の違いについて認識をするとともに興味を持つことができた。そこから学習課題である「いろいろな国の人とよりよく関わっていくためには，どうしていくことが大切だろう」を設定した。展開前段では，中国と日本の食事の時な作法の違い，アメリカと日本の身振りの違いからそれぞれの文化には，各国で育まれた意図があることを学んだ。その後，和紙職人ロギールさんの話から，文化の壁を乗り越えて活躍することの意義や文化と文化が融合することによって新しい文化が生み出されることを学んだ。この時，前時の和菓子の職人さんの話を想起させ，文化は，他の国の文化と交流することによって発展していることを再確認した。ここで見出されたキーワードは，本文からは「つながりができる」，ロギールさんの話からは，「発展」である。終末では，「いろいろな国の人とよりよく関わっていくために大切なこと」について話し合った。以下は授業時いろいろな国の人々とよりよく関わっていくために大切なことについて話し合った時の発話記録である。

p	知ることが大切だと思います。
t	知るという言葉が出たけど，今度交流するとき相手がどの国か分かる？
p	アメリカ，中国（それぞれがいろいろな国名をつぶやく）
p	分からない，調べるの無理
t	そんな時に実際に交流して，相手の国の人がいただきますの前にご飯を食べだしたら，どうする？
p	ほっておく，うーん（口々に）
p	合わせる。
t	合わせるって？
p	自分たちもその文化に合わせてみる。
p	認めることです。
t	認めるとは？
p	相手を分かってあげること

「知る」，「調べる」という言葉をたくさんの児童がワークシートに記述していたが，実際の交流場面を想起しながら具体的な内容について考えを深めることができた。

初めに出たキーワードは，「相手の文化を知る，相手の言葉でしゃべる，自分たちの文化を教える」である。

終末に児童が，「相手の文化を否定しない。相手の国の文化を壊すことになるから。」と発言をした。相手の国の文化を「壊す」ということの意味について考えたところ，「相手にとっても文化は大切なものである」という意見が出てきた。児童は，自分たちと同じように相手にも文化があり，大切なものであるということに気付くことができた。これは文化を尊重していく時に大切な考え方であり，話し合いの中で考えを深めることができた。

7．結果と考察

（1）質問紙調査から

質問紙21項目について主因子法による因子分析を行った。スクリープロット基準により，プロマックス

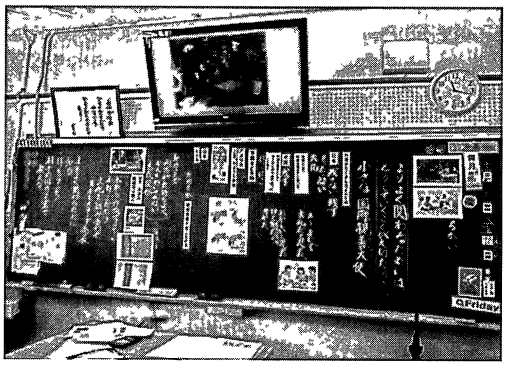

図２　道徳科「小さな国際親善大使」板書

回転を行った。その結果（表６），四つの因子が見出された。第１因子は，仲良くなりたい，関わっていきたい，知りたい等，他者や異文化との交流に対する意欲に関する内容から構成されるため，「他者や異なる文化に対する関心・意欲」とした。第２因子は，自他の文化を大切にする，親しみを感じるなどの内容から構成されるため「自他の文化の尊重」とした。第３因子は，考えやアイデアに関する内容が主なため「多様な見方・考え方」とした。第４因子は，異なる他者とのかかわりに関する内容であることから「他者の尊重」とした。

この因子から，今回の実践で道徳的実践意欲に関わりが深い第１因子「他者や異なる文化に対する関心・意欲」について，本研究では考察を行う。事前と事後の因子の平均値に対して対応のあるｔ検定を行った（表７）。また，各質問項目も同様に対応のあるｔ検定を行った（表８）。

表７　授業実践前後の因子Ｉの得点の平均値の差

因子	時期	平均値	標準偏差	ｔ値
Ｉ他者や異なる文化と関わっていこうとする意欲	事前	3.97	1.11	-2.89*
	事後	4.24	.99	

＊ｐ＜0.5

表８　授業実践前後の各項目の得点の平均値の差

質問項目	時期	平均値	標準偏差	ｔ値
他の国に住む人々と仲良くなりたい。	事前	3.97	1.34	-1.16
	事後	4.10	1.20	
いろいろな国の人とよりよく関わっていきたいと思う。	事前	4.22	1.20	-2.23*
	事後	4.47	1.00	
他の国の文化をもっとよく知りたい。	事前	3.72	1.28	-2.84*
	事後	4.14	1.13	

＊ｐ＜0.5

表７の結果から，「他者や異なる文化と関わっていこうとする意欲」の因子において平均値が有意に上昇した。表８の結果からその内訳をみると「いろいろな国の人とよりよく関わっていきたいと思う。」「他の国の文化をもっとよく知りたい。」の２項目の平均値が，有意に上昇した。自国の文化を学んで，他国の文化を知ってみたい，という気持ちや交流することのよさについて道徳の学習を通して学ぶことで，自分自身の学びにしていきたいという気持ちが高まっていることが反映したと考える。

表６　因子分析の結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
他の国に住む人々と仲良くなりたい。	**.942**	.021	.071	-.167
いろいろな国の人とよりよく関わっていきたいと思う。	**.756**	.155	-.038	-.001
他の国の文化をもっとよく知りたい。	**.672**	.122	.032	-.008
日本の文化を大切にしていきたい。	.053	**.788**	-.171	-.029
いろいろな国の文化について，知ったり，学習をしたりすることは大切なことだと思う。	.352	**.586**	-.123	.005
自分の国やその文化に対して，親しみを感じる。	.040	**.574**	.050	.071
他の国の文化に出会ったときに文化のちがいをみとめることができる。	.067	**.473**	-.039	.190
面白い考えを思いつくことができる。	-.169	.364	**.700**	-.056
人とは違った自分にしかない考えをよく思いつく。	-.066	.333	**.655**	-.080
自分の考えを話す時にまちがえることを恐れてしまう。	.141	-.346	**.607**	-.111
新しい考えやアイデアを考えるのが苦手だ。	-.054	-.156	**.585**	.302
物事を考えたり，アイデアを出したりする活動が好きだ。	.179	.100	**.503**	.112
相手の気持ちを考えながら，話すことができる。	-.083	-.035	-.007	**.840**
他の人からのアドバイスを素直に聞いて，考えを改めることができる。	.006	.164	-.007	**.554**
相手の様子を見ながら，行動をすることができる。	.079	.150	.039	**.492**

因子相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	—	.519	.307	.471
Ⅱ		—	.520	.544
Ⅲ			—	.350
Ⅳ				—

(2) 児童の記述内容から

「小さな国際大使」の振り返りの記述内容でパフォーマンス評価を行った。(表9) 主な回答の傾向にあるように，相手を不快にさせないという回答が一番多かった。これは，他者思考に当てはまるものである。まずは，自分のことよりも相手のことを考えるという傾向が多くみられる。また，Ⅳ段階の3名の児童の回答を示し，今後の見通しについて考察をする。

表9　授業後の児童の振り返りの傾向 n =59

	割合	主な解答の傾向（複数回答あり）
Ⅳ	22%	・相手にとっても普通のこと　2人 ・相手にとっても大事な文化　6人 ・お互いが気持ちよくなれる　2人 ・お互いに分かり合う機会　2人
Ⅲ	68%	・相手を気遣う，不快にさせない（傷つけない，いやな思いをさせない等）　27人 ・相手とつながりたい（まずはこちらから歩み寄る）　6人 ・お互いに違うから　3人
Ⅱ	7%	・おかしいと思われたくない　2人 ・自分が知りたい　1人
Ⅰ	3%	・無回答　2人

・児童A
　文化を認め合う。相手のことを分かち合って関わっていかないと有効な関係を築けない。でも相手に合わせすぎても少し変な気がする。
・児童B
　英語で聞いたり教えたりすることができるようにする。理由は聞いたり教えたりすることで勉強や学びにもなるし，お互いにいい気持ちになるから。
・児童C
　前に外国の人と何をするかを軽く話し合った時に日本のことという意見が多かったから逆に外国のことを知りたいと思った。なぜなら日本のことも相手が聞いてくるとお互いに文化が知れると思った。

児童Aは，相手に合わせるだけの交流に対して違和感を感じており，交流して仲良くなるためには，双方向のやり取りが必要であることに気付き始めている。児童Bは，相手の国で話すことについて書いているが，言葉を話すことで相手のみならず自分自身の自己実現につながることに気付いている。児童Cは，国際交流の学習を想起しながら書いている。この記述にあるように体験活動も内容項目C「国際理解・国際親善」の理解を進めていく上で重要な役割を果たしている。また，自分自身が相手からどう思われるかということに主眼を置いている児童もⅡの段階にいるため，意見の交流を通して，児童の思考を深めていくことは有効であると感じた。

また，質問紙項目「色々な外国の人とより良く関わっていくために大切なこと」の自由記述における出現語数（実践面に関るもの）についてKHコーダを用いて分析し，授業実施前と実施後で比較した。その結果が表10である。

表10　自由記述「色々な外国の人とより良く関わっていくために大切なこと」の出現語数の変容

事前		事後	
出現語	人数	出現語	人数
知る	8	**知る**	10
関わる	4	話す	10
教える	4	<u>認め合う</u>	6
認める	4	**認める**	5
覚える	3	考える	4
遊ぶ	3	**教える**	3
話す	3	**学ぶ**	2
考える	2	関わる	2
学ぶ	1	**押し付けない**	1
気遣う	1	覚える	1
取り入れる	1	行く	1
守る	1	**取り入れる**	1
<u>譲り合う</u>	1	**守る**	1
<u>知り合う</u>	1	<u>譲り合う</u>	1
聞く	1	<u>分かち合う</u>	1
誉める	1	**聞く**	1
分からない，無回答	15	分からない，無回答	2

事前事後の比較で顕著なのは，「認め合う，譲り合う，分かち合う（下線）」といった双方向のつながりを意識した語数が増えたことである。道徳の学習を通して，他国の文化はそれぞれの国に住む人々にとって大切なものであると気づいたことの表れと考える。また，「知る，認め合う，認める等」の太字は，文化理解に関わる内容である。事前21人→事後31人に増えており，文化理解の側面から国際理解・国際親善に取り組んでいこうという姿勢が伺える。内容項目C「伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度」の学習を取り入れた成果と言える。

8．成果と課題

(1) 成果

「他者や異なる文化と関わっていこうとする意欲」については，取り組みの結果，有意に上昇した。また，児童の道徳的思考の発達段階は，集団で見ると他者思

考から自己相互思考へと高まりを見せ始めている。質的な面でも内容項目C「国際理解・国際親善」に関わる児童の道徳的実践意欲について高まりが見えている。児童の自由記述の中に文化とのつながりも見られたため，内容項目C「伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度」との関連は，一定の成果を上げることができた。

また，本実践を通して，内容項目C「国際理解・国際親善」に関わる児童の道徳的思考についての整理ができた。今後，同様の実践を積み重ねていく時の指標になると考えられる。

(2) 課題

本実践では，道徳的実践意欲についての実践研究を行ったが，自己中心思考にとどまる児童が数名見られた。考え・議論する道徳が求められている現在，主題について，児童相互の意見交流を通して深めていくことができるような授業実践を実現していく必要性を感じた。

また，本実践は小学校高学年でのものであったが，改訂では小学校低学年・中学年に新たに内容項目C「国際理解・国際親善」の項目が付け加えられている。それぞれの発達段階での実践検証を行い，整理をしていくことが必要と考えられる。

また，C［伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度］の学習と関連させて行い，一定の成果はみられたが，比較検証を行っていないため，内容項目を関連させたことによる効果については明らかにすることができなかった。

謝　辞

本実践を進めるにあたり，ご協力をいただいたM小学校の先生方，児童の皆さまに深く御礼申し上げます。

註・引用文献

1），3），6）文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科道徳編，廣済堂あかつき.

2）中央教育審議会（2016）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）.

4）安野功（2010）伝統・文化に関する教育を充実させるためのポイント，初等教育資料，no886，東洋館出版社，p4.

5），7）貝塚茂樹（2016）戦後の道徳教育と国際理解教育ー「特別の教科道徳」の課題を中心にー，国際理解教育 vol.22，国際理解教育学会，pp40-49.

8）鈴木由美子・宮里智恵（2012）やさしい道徳授業のつくり方，渓水社.

参考文献

日本政府観光局（2018）年別 訪日外客数，出国日本人数の推移，https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/marketingdata_outbound.pdf（参照2018.11.23）

武田明典・澁谷由紀・小柴孝子（2017），グローバル教育尺度開発の試みー小・中・高校教師による児童・生徒への獲得期待ー，グローバル・コミュニケーション研究5，神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所，pp127-147.

鈴木 佳苗・坂元章・森津太子・坂元桂・高比良美詠子・足立にれか・勝谷紀子・小林久美子・櫃淵めぐみ・木村文香（2000），国際理解測定尺度（IUS2000）の作成および信頼性・妥当性の検討，日本教育工学雑誌　23(4)，日本教育工学会，pp213-226.

朝倉喩美子・杉中康平・田沼茂紀ほか（2018）道徳5きみがいちばんかがやくとき，光村図書出版株式会社.